

ときめき インタビュー



板橋 よしえ
いたばし よしえ / Yoshie Itabashi

…プロフィール…

昭和50年、越谷市生まれ。株式会社ミニストリー常務取締役。埼玉第一（現・開智）高等学校を卒業後、服飾系専門学校「パンタンデザイン研究所」に入学。在学中の平成7年、ファッションブランド〈Candy Stripper〉を立ち上げる。遊び心あふれる個性的なデザインは立ち上げ当初から人気を集め、現在も10代~50代まで幅広い年齢層の女性に支持されている。またミュージシャンの衣装、スタイリング、CDジャケットのアートディレクション等も手がけている。

日本だけでなく、いまや世界中の若者から注目される「原宿系ファッション」。その原宿系を代表するブランド〈Candy Stripper〉(キャンディストリッパー)を作り、20年以上に渡ってオリジナリティあふれるファッションを提案し続けているデザイナー・板橋よしえさん。好奇心と行動力に満ちた、その人柄に迫ります。

★洋服好きは母の影響 進学校から服飾の世界へ

「幼い頃の私は母の手作りの服をよく着ていました。母もファッション雑誌をずっと愛読するような人で、たまに雑誌に出てくるお店で洋服を買ってくれることもありましたね」
お母さんの影響を受けながら成長し、小学校高学年の頃には「私はこれが着たい」とファッションへのこだわりを見せ始めた板橋さん。同級生に「よしえちゃんの服、かわいいね。どこで買ったの?」と聞かれる存在だったとか。

「高校生になると、もう四六時中、洋服のことばかり考えていました。週末になると金髪のウィッグをつけて原宿に通ったりして。母から、越谷では目立ちすぎるからウィッグはやめて!と言われていました(笑)」
私立の進学校に通っていた板橋さんですが、大学には行かず、ファッションの専門学校に行くことを決意。

「学校の先生にはとにかく反対されました。でも、両親はやりたいうことをやらなさいと言ってくれたので、一切迷うことはなかったですね」
専門学校に入ってから、ファッション漬けの毎日。洋服作り、スタイリング、ファッションショー…とにかくやりたいことだらけだったといいます。

★19歳でブランド立ち上げ 20歳で会社設立

「やりたいことを全部やるためにはどうすればいいか? その答えが『ブランドを作る』ことでした。自分が本当に着たい服を作りたい一心で、友達を誘って〈Candy Stripper〉を始めました。思いは真剣とはいえず、みんな学生だったり仕事を持っていたりしたので趣味的にやるつもりでした。でも、雑誌に取り上げられたりしたことで反響がすごくて、とつてもうれしいのと同じ時に、通信販売の受注生産が追いつかない状況がどんどん深刻にな

★新たな世界が開ける アーティストとのコラボ

「原宿にお店を出すのは夢でしたが、事務所と店舗が一緒にあるので、作ったものをすぐお店に並べることができてお客様とも触れ合える。私にとってこのお店は理想の場所なんです」
ブランドは今年で22年目。40代

ションも積極的に行っていきます。
「初めてステージ衣装のスタイリングをしたのがGLAY。男性ミュージシャンが私に声をかけてくれることが衝撃でしたし、新鮮でした」



コラボレーションしたスカジャンを着た二階堂ふみさん

それ以降、PUFFY、チャットモンチーなどさまざまなアーティストの衣装を担当。最近、印象的だったのは女優・二階堂ふみさんとのコラボだったそう。

「ふみちゃんのリクエストは和のテイストでカッコイイ、本格派のスカジャン。和というのは私の中にはない世界だったので、正直大変でした。でも新宿伊勢丹で

★ママになっても意欲的 いよいよ海外進出も

販売したらものすごい大反響で、悩んだ分、達成感がありましたね」
今年PUFFYの大貫亜美さんとのユニット〈ROMPUS (ロンパス)〉のコレクションも発表予定。アーティストとの共同製作は、自分に新しい引き出しを作ってくれる刺激的な場だと言います。

なる女の子を出産。子育てと仕事で多忙な毎日ですが、月に一度は越谷の実家に帰省するそうです。
「越谷に来ると、空気がいいなあ」と思います。星が見えるのもいい! ブランドを立ち上げた頃はまた実家に住んでいて、忙しくて毎日終電で帰っていたんですが、きれいな星空に癒やされました」
ママになっても仕事への意欲はとどまることなく、海外進出の計画も動き出したといいます。
「海外からのオフアは以前からあつたのですが、実現しないままでした。子どもを持ってホントに自分の時間がなくなったとは思いますが、スタッフ、友人、家族、そしてお客様に支えてもらいながら、これからもブランドを成長させていきたい。私の服を好きだと言ってくれる人がいる限り、おばあちゃんになっても作り続けます」
地元が生んだ日本の「カワイイ文化」をけん引するファッションリーダーは、世界に向かってさらに飛躍してくれそうです。



「これまで、アイデアが思い浮かばずに困ったという経験は無い」という板橋さんの作品。日常生活で見たり感じたりしたものが、次々と形になっていきます



デザイナー 板橋 よしえ さん

私の服を好きでいてくれる人がいる限り、おばあちゃんになっても作り続けたい!

「流行を追うのではなく、ブランドの独自性を保つことが一番大切。でも独自すぎて、着にくいものにならないよう心がけています」



キャットストリートにある原宿店。装飾は大好きな赤やピンクで